

# 小学校美術教育におけるモンゴル国と日本の技能指導

妻藤 純子

(岡山理科大学教育学部)

本レポートは、モンゴル国と日本の小学校の美術教育（図画工作科）における技能指導の特徴をまとめたものである。学習指導要領や教科書をもとに、技能に視点を当て、その学習内容を比較した。モンゴル国での教科名は「美術・技術」であり、その教科書題材には、描き方やつくり方などの技術だけでなく、裁縫、野菜の調理の仕方も設定されている。技術に関する内容は、造形表現に必要な技術と、生活上必要となる技術で構成されているといえる。モンゴル国における本教科には技術に関する学習が数多く含まれており、技能の育成が重視されていることが明らかとなった。

キーワード：美術教育、小学校、技能指導、モンゴル国、比較分析

## 1. はじめに

我が国の教育において子どもに身につける力として、すべての教科を通して3つの柱が掲げられている。その一つに「知識及び技能」が挙げられ、図画工作科においてもその指導の充実が図られようとしている。図画工作科は実技教科でありながら技能指導が曖昧にされてきた観がある。小学校において技能を指導することは、子どもの豊かな発想や表現を失わせるのではないかといった懸念を多くの指導者が抱いていたといえる。モンゴル国の美術教育をみると、技能を身につけ、その向上を図るための指導が重視され、我が国の図画工作科とは指導が異なる。モンゴル国の指導の在り方を知ることは、子どもの自由な考え方や見方を第一義に置きつつ、自分らしい表現を実現することのできる技能の向上をめざす我が国の指導の在り方を改めて問い直すことにつながると思う。本レポートにおいては、技能指導に視点を当て、両国の美術教育の特徴をみていくこととする。

## 2. 日本の小学校における美術教育

### 2.1. 日本の図画工作科の指導の特徴

日本の小学校は、第1学年から第6学年の子どもで構成されており、6歳から12歳という発達段階の異なる子どもたちが在籍している。6年間で多彩な知識や技能を身につけるなど、子どもの成長は著しい。現在、学校現場においては、平成29年告示の小学校学習指導要領（文部科学省、2018）に基づき、各教科の指導が展開されている。本学習指導要領の改訂の特徴は、子どもに育てるべき力を3つにまとめ、各教科共通のものとして示したことにある。それまでの学習指導要領では、これらの内容は指導の観点として教科ごとに設定されており、図画工作科においては、「関心・意欲・態度」、「発想・構想の能力」、「創造的な技能」、「鑑賞の能力」の4観点であった。現行の学習指導要領では（1）として「知識及び技能」、（2）として「思考力、判断力、表現力等」、（3）として「学びに向かう力、人間性等」の3つが示されている。この3つの柱を指導目標として掲げ、実践されている。

図画工作科における教科の内容には「表現」と「鑑賞」の2領域がある。表現領域には「造形遊び」、「絵や立体、工作に表す」があり、鑑賞領域は文字通り「鑑賞する」がある。本レポートでは、表現領域における技能指導に焦点を当てる。

図画工作科では、他教科とは異なった指導に対する考え方がある。このことは、本教科の検定教科書（日本文教出版、2020）の構成に表されている。本教科では、「1.2 上・下」「3.4 上・下」「5.6 上・下」のように二学年をまとめた教科書となっている。これには、2年間を通し、児童の実態などに鑑みながら、弾力的な指導により各学年

の目標を達成しようとする意図がある。図画工作科で培う力は、一学年の間に達成されるものではなく1年間で獲得した力を基にしなが、次の1年間でその力を生かしたり、発展的な学習内容を展開したりする。学びの連続性を意識し、目標達成を実現させようとするものである。教科書の使用については、おおむね上巻を下の学年で、下巻を上級の学年で使用する。1.2 上であれば主として1年生が使用し、1.2 下は、主として2年生で使用する。技能の習得は経験の積み重ねが重要で、時間を要する。例えば道具の扱い方の場合、一度道具を使ったからといって、その道具を熟知し、使いこなせるようになるわけではない。繰り返すことで、道具の特性を理解しながら、より効果的な使い方ができるようになる。技能が向上していくことで、子ども自身が「つくりたいものを、つくりたいように、つくりたいことができる」ようになるのである。

## 2.2. 学習指導要領解説及び教科書題材からみえる日本の技能指導

現行の学習指導要領においては、技能の指導として「材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくり表したりすることができるようにする。」(文部科学省, 2018, p.13)と示されている。図画工作科での「技能」は、単に何かをつくり上げるという意味ではなく、手や体全体の感覚などを働かせ、創造的な活動を楽しむ過程を通して育成されることが重要であるとしている。また、技能の育成においては、自分のイメージしたことをもとに表し方を工夫したり、表現方法をつくりだしたりすることも重視している。「技能は一定の手順や段階を追って身に付くだけでなく、変化する状況や課題に応じて主体的に活用する中で身に付く。児童一人一人の自分なりの「技能」は、豊かな思いに基づいた「思考力、判断力、表現力等」とともに働いて、初めて発揮されるものである。」(文部科学省, 2018, p.13)とされ、豊かな創造性の中で、培われるということが指導の基になっている。

### (1) 「造形遊びをする」の学習における技能指導

学習指導要領において、表現領域の中に「造形遊びをする」という内容がある。これは、遊びのもつ主体性、繰り返される発想と表現といった特徴をもとに展開される。図画工作科では作品制作を目的としていると一般的には捉えられているが、造形遊びは作品を制作し、完成させることを目的としていない。つまり活動の中で、切る、つなぐ、並べる、積むなどの行為そのものを重視し、思いついたことを実現するにはどのようにすればよいかなど考えた方法を試したり、やり直したりすることを繰り返す活動である。この活動を通して、子どもは経験からもち得ている知識や、授業で身に付けた既習事項を生かしつつ、新しい表現方法、技能を獲得していくのである。指導者は、子どもの活動を予想し、必要と思われる指導や支援を行う。子どもの主体的な行為や思考を尊重しながら、学びの中で獲得させるべき技能について指導していくこととなる。以下、造形遊びに関する教科書題材(日本文教出版, 2020)の具体的な内容である。

1.2 年生の学習では、新聞紙や広告、色画用紙などの紙を、いろいろな幅や長さで切り、それを好きなようにつなげて楽しむ。これは主として1年生の活動である。この活動で獲得する技能は、はさみで切ることと、つなぎ方を工夫して、つなぐことである。つなぎ方は多様に考えられる。切った紙をまっすぐつなぐこともできるし、輪をつくってつなぐこともできる。つないだ箇所が外れないようにするために、のりやテープを効果的に使うことも体験させたい技能の1つである。

3.4 年生の学習には、段ボールの板に切り込みを入れて、他の段ボールの板と組み合わせ、できた形を楽しむという活動がある。これは主として3年生で実施される。段ボールを組み合わせれば、大きな形となり、全身を使い、また友達との協働的な活動にも発展する。この学習は、5年生で実施する板材を使った木のパズルの制作につながる。またプロジェクターなどの光源を使い、身近にあるものに光を当て、影をつくり、他の影と組み合わせたりしながら形や透けて見える色などを楽しむ内容もある。この学習は主として4年生で行われる。

5.6 年生の学習は、風を感じられる場所や、葉が落ちている場所などで、それらを用いてどのような活動ができるか考え、思いついたことを表現していくもので、主として6年生の活動である。紅葉して落葉した葉の敷き詰め方を考える。色別に模様を描きながら並べたり、形や大きさの異なる葉を組み合わせ敷き詰めたりするなど、多様な考えが生まれる。また、風通しのよい場所を生かした活動では、風を視覚化するために、透明なビニールシートや色テープを使い、それらを風に乗せている。この学習で身に付けさせたい技能は、自然の形や色、動きなどの特徴を捉えること、そして、その特徴を生かしながら思いついたことを実現させるための材料の選択や、つくり方

を考えつくることである。

学習指導要領では造形遊びにおける技能に関する指導事項について次のように示されている。（文部科学省,2018,p.29）

○低学年（第1学年及び第2学年）

「身近な材料を並べる、つなぐ、積むなど、手や体全体の感覚などを働かせて活動を工夫してつくること。」

○中学年（第3学年及び第4学年）

「身近な材料や用具を組み合わせたり、切ってつないだり、形を変えたりするなどして、手や体全体を十分に働かせ活動を工夫してつくること。」

○高学年（第5学年及び第6学年）

「経験や技能などを総合的に生かしたり、方法などを組み合わせたりするなどして活動を工夫してつくること。」

これらの技能に関する指導事項を踏まえ、指導に当たっては、活動と材料などについて考慮しなければならない。活動内容によって必要とされる材料は異なり、また、使う材料によって、子どもが思い付く行為や活動そのものが変わってくる。造形遊びにおける技能指導は、子どもの主体的な発想と活動を中心とし、思いついたことを試したり、つくったものをつくりかえたりすることを繰り返すなど、子どもの活動が多様に変化していく学習において、容易なことではない。一見すると、この学習は単に遊んでいるだけのように捉えられがちであることは否めない。実際に学校現場においては、作品をつくることを目的としないこの学習は、作品というゴールがないことで、何をどのように指導すればよいか、わからないまま授業が展開されることも多々ある。指導者は、子どもがどのように自分の思いついたことを実現していくか、予め想定しておく必要があり、それをもとに材料や用具を準備しておかなければならない。また、子どもの活動に対して、柔軟に対応することも必要である。造形遊びにおいて技能は、考えたことを試したり、やり直したりするなど活動を通して獲得される。「技能」は、単に表現を実現させるための能力という捉えではなく、発想をさらに広げるきっかけになり得るものでもある。

低学年から高学年にかけて、発達段階に応じて、自分の身の回りから他者へ、そして社会へと広がる活動が設定されている造形遊びは、活動を通して、人と人とのつながりをも生じさせる。一人から始まった活動が、自ずと他者との活動に発展していくことも造形遊びの特徴でもある。主体的な活動が、発想を広げ、多様な技能を育成することができる。子どもの活動を見守り、主体的な活動の中で、行為が発展していくような指導が不可欠となる。

## （2）「絵や立体、工作に表す」の学習における技能指導

表現領域には、「造形遊びをする」の他に「絵や立体、工作に表す」がある。この内容は、子どもが表したいと思うことが基になり、表したいことを「絵」、「立体」、「工作」に表していくというものである。造形遊びとの違いは、作品をつくり、完成させることを目的とすることにある。「立体」と「工作」は同一の活動ではない。「立体」とは、粘土や木などを使って思ったことや感じたことを立体に表すことである。一方「工作」とは、でき上がった作品の意図や用途がある程度明確で、生活の中で使うものや、自分の思いを伝えたりするものを表すことであり、それにより自分の生活を楽しくしたり、豊かにしたりすることをねらっている。指導者も子どもも「立体」とは異なる内容であることを理解しなければならない。「絵や立体、工作に表す」の内容は、作品の完成というゴールが明確にあるため、指導者にとっては「造形遊び」に比べ、指導すべきことを明確にもちながら指導することができる。

「絵や立体、工作に表す」は、6年間を通して多種多様な題材が設定されている。図画工作科においては、他教科でいうところの単元を「題材」と呼ぶ。表現するテーマ、使用する材料、用具は多様で、それに伴って育てる技能も多様である。材料に関しては、家庭にある空き箱や食品トレーなどのいわゆる廃材、紙類、粘土、針金、木材、自然物などがある。用具については、クレヨンや水彩絵の具などの画材、はさみやカッターナイフ、木工用具、ペンチ、彫刻刀などを使用する。材料や用具が異なることは、表現方法の多様性を意味し、材料や用具の数だけ指導すべき技能があるということである。「絵」、「立体」、「工作」を6年間でバランスよく設定していくことで、あらゆる技能を、制作を通して身に付けることができるように考えられている。

学習指導要領では、「絵や立体、工作に表す」における技能に関する指導事項について次のように示されている。

(文部科学省,2018,p.30)

○低学年（第1学年及び第2学年）

「思う存分に手や体全体の感覚などを働かせて、表したいことを基に表し方を工夫して表すこと。」

○中学年（第3学年及び第4学年）

「客観性や他者意識の芽生えに配慮し、表したいことに合わせて表し方を工夫して表すこと。」

○高学年（第5学年及び第6学年）

「社会的な視野の広がりを踏まえ、表現方法に応じて材料や用具を活用するとともに、表現に適した方法などを組み合わせたり、表したいことに合わせて表し方を工夫したりして表すこと。」

図画工作科において「表現する」とは、子どもが作りたいものを、作りたように、つくることができることである。子どもが作りたいものを発想するだけでは、「表現する」には至らない。そこに技能が介在しなければ成り立たない。技能はものづくりだけに働く力ではない。技能から新たな発想が生まれたり、発想から新たな技能を追い求めたりするなど、技能と思考は、深く関わり合っている。どちらの能力も共に育っていくことを理解し指導することが重要である。

ここで、教科書題材（日本文教出版,2020）から各学年の具体的な技能指導についてみていくこととする。

①「絵に表す」

図画工作科といえば絵を描くことと多くの人がイメージするが、そのイメージ通りの活動が「絵に表す」である。

1.2年生では、クレヨンや水彩絵の具（共同）を用いて、自分の経験した出来事の様子と、そのときの気持ちを他者にわかるように描くことがねらいとしてある。3年生以上になると水彩絵の具を用いた制作が基本となる。「絵に表す」で身に付けたい技能は、自分の伝えたいことに合う形や色を見つけ、他者に伝わるよう工夫して描くことである。

1.2年生の発達段階に鑑みると、絵画表現において、全体の構成や配色は、あまり重要ではない。子どもの伝えたい思いを重視し、それを他者にわかるように伝えるための指導をしていくのである。低学年の場合、思いを聞くなど対話を通して、子どもが一番伝えたいことやそのときの気持ちを言葉にさせることで、表したいものをはっきりさせていく段階が必要である。つまり、発想や構想などと技能を関連づけながら、表したいことを表すためにはどのようにすればよいか子どもに考えさせ、指導者が過度に形や色を指示したりすることのないようにすることが重要である。描くテーマとして、日常生活での経験や物語を読んだ感想画、想像の花などがある。

3.4年生は、1.2年生と同様に生活の中で体験したことや、物語の絵などを、水彩絵の具を使って描く。また、段ボールに描く、土で描くなど、日常あまり体験しない紙の種類や画材を用いた学びもある。この年齢の子どもは写実的な表現を求めるようになり、みえたように表現できたかどうかを自ら判断する。また、より客観的に自分をみるようになるため、自分の表現と他者の表現を比較し、上手か否かで作品を評価するようになる。みえたように描けないことや他者との比較により、絵画表現に対する苦手意識を強くもち始める時期でもある。指導においては、子どもが追求しようとしている表現ができるよう適切に指導しなければならない。具体的に表現技術や技法を示すことも必要である。

5.6年生になると、全体の画面構成や配色、奥行きなどを表すことを目標とする学習になる。また、感情を絵に表すなど、抽象表現も題材として登場する。風景画など写実的な表現をテーマとする学習では、構図の取り方、自然の色に近づけるための混色の仕方や筆の使い方などの表現方法の指導を子どもから求められることも多い。

「絵に表す」の学習には、版画も含まれる。1.2年生では、紙版画、スタンプやステンシル技法での表現を3年生以上では、彫刻刀を用いて板を彫り進める版画を学ぶ。5.6年生では、日本美術を代表する浮世絵をテーマにすることもある。

学年を問わず、自分の考えた表し方で、表したいことを他者に伝えることができたとき、子どもは技能に対する関心や意欲が高まり、さらなる向上が期待できる。また、絵画技法の指導もある。クレヨンと水彩絵の具を併用する場合、クレヨンが水をはじく性質を利用したバチック技法など、モダンテクニックを学ぶ。モダンテクニックなどの技法は、それだけを取り出して、指導するのではなく、モダンテクニックを使った表現が可能なテーマを設定

し、制作することで獲得できるよう指導される。

## ②「立体に表す」

「立体に表す」学習は、材料とその加工に伴って必要な技能も多岐に渡る。材料には、粘土（油粘土、土粘土、紙粘土など）、板材、針金、木の枝や木の実などの自然物、空き箱などの廃材が主として用いられる。このことは工作に表すにおいても同様である。つくりたいものをつくり出すことができるという技能だけでなく、用具を扱うために必要な知識や技能も身につけさせることを意図した学習でもある。材料の加工には、電動式の用具も使用する。

1.2年生では使う用具は主にはさみである。2年生ではカッターナイフも扱う。内容では、粘土で動物や食べものをつくったり、楽しかった思い出の場面を形づくったりする。油粘土と土粘土を主に使う。紙をくしゃくしゃにして、かたちをつくる。1.2年生では、制作を通して様々な素材体験ができるようにすることをめざしている。

3.4年生では、初めて木工用具を使った学びがある。板材をのこぎりで切り、金槌でくぎを打ち付けて自分の好きな形に仕上げていく。また、透明なビニール袋に色紙を詰めてふわふわにするなど、心地よい感覚を通して発想を広げていく学習もある。

3.4年生の木工用具の経験をもとに5.6年生では、電動式の糸鋸を使った学習が登場する。図画工作科において電動の工作用具は初めての出会いである。電動糸鋸で、厚さが5mm程度の板材を自由に切る。その後、できた形に切り込みを入れ、板同士が組み合わせられるようにして立体的なパズルをつくる。学校や児童の実態に応じて平面的なパズルの制作も可能である。いずれにしても電動式の用具の使用は初めてとなるので、期待感と緊張感をもちながらの活動になる。子どもは、のこぎりとは異なり、自在に曲線を切り取ることを楽しむ。思い通りの線に切るができなくとも、繰り返す中で、使い方のコツを見つけ、様々な曲線で形づくるようになる。立体パズルの場合、板の厚みを考慮に入れながら、組み合わせられるように板に切り込みを入れることは子どもにとって簡単なことではない。厚みより切り込みの幅が狭ければ、組み合わせることはできないし、少しでも広いと隙間が開き、組み合わせてもすぐには抜けてしまう。そのため、板の動きを細かく調整しながら切ることになる。教科書にはこの技能についてのヒントが示されている。活動を通して、用具の使い方や特徴を知り、何度も試したり、切り方を工夫したりすることで、技能を身に付けることができる。この学習では、自分が予め想定した形の通りに切るのではなく、刃に板をあて、板を自在に動かすことで偶然できた形を楽しませる。このような活動を設定することで、用具に慣れ、使い方が正しく理解できるようになる。子どもは、用具を使うことを喜び、楽しむ。それを使うだけでも楽しさを感じるが、自分の思い描いたとおりに形をつくり出すことができれば、さらに関心・意欲は増す。技能の獲得が、発想の広がりにつながっていく。

本教科は、様々な用具を用いるものづくりの学習である。用具の中には怪我をする危険性が高いものもある。このような学習の場合、技能指導で最も重要なことは、けがをしない（させない）ための指導である。子どもは大人が思いつかないような行動や行為をすることがある。慣れない用具を使用するときは、自分のしやすいように使い方を勝手に変更してしまうこともある。指導者は、活動場所と子どもの実態から危険のある可能性を予測し、指導しなければならない。

## ③「工作に表す」

工作の定義は、使用目的や意図がある程度明確な作品を制作することである。

1.2年生では、食品トレーや空き箱などの廃材、どんぐりなどの自然素材を使って、動くおもちゃや楽器をつくる。また、色紙をはさみで切って飾りをつくったり、空き箱で宝箱をつくったりする。また、紙を使って被り物やベルトなどをつくり、着飾って変身する活動もある。

3.4年生では、木工用具を使い、板に釘を打ち付けたり、ゴムの力を利用した動くおもちゃをつくって遊んだりする学習がある。また、ペットボトルやガラスの空き瓶を粘土で覆い、鉛筆立てや小物入れをつくったりもする。

5.6年生では、木や粘土を使って宝箱や鉛筆立て、LEDライトを使ったランプなど、生活に役立つものをつくったりもする。陶芸もある。また、廃材を使って夢の街をつくるなど、社会問題を意識した工作もある。

特徴的な工作として、開くと飛び出す仕組みを使って、日頃お世話になっている人に感謝の気持ちを伝えるなど、相手意識をもたせた活動がある。これは、一般的には4年生で学習する題材である。自分のつくりたいものを

つくっていくのであるが、贈る相手の存在を意識しながら制作することになる。この学習では、飛び出す仕組みについて、子ども全員に理解させなければ、子どもはカードをつくることができない。教科書にも仕組みのつくり方が示されており、自分一人でも仕組みの理屈がわかり、制作できるよう配慮されている。指導者は、表し方を明確に指示することも必要である。飛び出す仕組みがわかり、自分の伝えたい思いに合う仕組みを選択し、形や色をみつけ、つくっていく。6年生にも、板材を使って学校の教室表示をつくるなど、多数の相手に対して情報を伝えるための学習もある。これらの学習は、相手意識をもたせることに意味をもつ。相手のことを考えながら制作する場合、自ずと相手の好きなものや色などを用いたり、相手が喜んだり、驚いたりするような表し方をしようとする。そして、今まで自分が経験したことのない形を切ったり、色を選んだりして制作することになる。つまり、すでに身に付いた技能を働かせるだけでなく、新しい技能を子ども自ら獲得する必要があることを、意図的に設定した学習といえる。このように新しい挑戦を意図した題材においては、試したり、やり直したりできるようにすることが必要である。

### 2.3. 日本の技能指導の特徴

「造形遊びをする」「絵や立体、工作に表す」の技能指導について紹介してきたが、日本の技能指導の特徴は活動の中で技能を獲得させるということである。発達段階など子どもの実態に応じて指導すべき事項を指導しつつも、あくまで表現者は子どもであることを認識し、表現は子どもに委ねる。指導者が積極的に活動に介入し子どもの思いを考慮に入れない指示を出したり、具体的な表し方を子どもに強制したりすることはない。指導者の価値観を押し付けることのないよう、子どもに表したいことや表したいことに適した表し方を考えさせることを重視している。子どもの状態を把握した上で、指導者は教科の目標が達成できるよう、ヒントを与えたり、必要に応じては具体的に表現方法を提示したりする。考えたことを試したり、友達のことを聞いたりしながら、自力解決できるよう指導者は、そのための手立てを準備している。困っている子どもがいれば、対話により、問題を把握し、解決できる糸口として、いくつかの解決策を提案することもある。

子どもに委ねるといっても、学習目標の把握や活動に対するイメージをもたせることは、活動前の準備として重要不可欠な指導である。また、飛び出す仕組みやクランクのように知識が必要な制作や、彫刻刀やのこぎりなどの用具を用いる制作では、活動する前に指導者が子どもにつくり方や使い方を、時間をかけて説明しなければならない。技能指導で重視されていることは、子ども自身が考えたことを試したり、思いついたことを基につくりかえたりする学びが保障されていることである。失敗の中から新たな考えが生まれることは多い。各学年で積み重ねることによって身に付いた技能を働かせつつ、試行錯誤を繰り返しながら、新しい技能をさらに積み重ね、身に付けていくことができるようにする。学びの連続性を踏まえ、子どもがいかに主体的に考え、自分らしさを表現することができるために、指導すべきことと、子どもに委ねることを明らかにしながら授業に臨むことが指導者の子どもとの向き合い方でもある。

## 3. モンゴル国の小学校美術教育

### 3.1. モンゴル国の教育制度

モンゴル国の教育制度（独立行政法人大学改革支援・学位授与機構, 2021）は、日本のそれとは異なる。社会主義体制から民主主義体制へと変化した後、2006年に教育法が改正され、日本と同様に6. 3. 3制の義務教育となった。そして、2012年の教育法の改正により、小学校5年制、中学校4年制、高等学校3年制とし、義務教育を小学校と中学校の9年間と定めている。日本における6年生は、モンゴル国では中学生となる。小学校では「美術・技術」という科目があり、その内容から日本の図画工作科に相当する科目といえる。教科書は「美術・技術Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ」があり、それぞれ小学校1年生から5年生が使用している。小学校1年生が使用する「美術・技術Ⅰ」の教科書に「12年制普通学校の1年教科書」と示されており、このことから小学校、中学校、高等学校の12年間を通したカリキュラムで、子どもの育成を図っていることがわかる。

モンゴル国は2014年に作成したカリキュラムを、全国の学校で実施した。2019年には、カリキュラムの見直し

を図っている。(モンゴル教育文化科学スポーツ省, 2019) 学校教育を通して、伝統的な文化や慣習を尊重し、母国に誇りをもつような子どもの育成をめざしていることもうかがえる。日本の図画工作科の内容に、焼き物や竹工などの伝統的な技術を用いた工作が設定されていたり、作品鑑賞の対象として伝統的な工芸品も挙げられていたりしている。また、木工用具に代表されるように、用具を使うことは、先人たちの知恵を知り、文化の大切さに気づく契機となることが示されている。社会の近代化とデジタル化の中で、失われつつある伝統的な文化の価値を、改めて認識し、継承していく努力の必要性は、モンゴル国も我が国も同様であるといえる。「美術・技術」の授業時間数は、1年生は58時間、2年生から6年生が各学年64時間となっている。日本の場合は、1年生が68時間、2年生が70時間、3.4年生が60時間、5.6年生は58時間である。モンゴル国の小学校における一単位時間は、1.2年生は35分間、3.4.5年生は40分間となっており、日本より短い。年間授業時間数に大差はないが、一単位時間が短いモンゴル国では、どのように授業を展開し、教育的効果を図っているのかなど授業の実際についても興味深い。

### 3.2. 小学校における指導の特徴

#### (1) 教科「美術・技術」

モンゴル国において日本の図画工作科に当たる科目は「美術・技術」であり、技能ではなく「技術」と示している。学習内容の多くが平面表現であり、平面表現で学んだことを生かし、粘土や紙コップなどの身近な材料を使った立体表現も設定されている。折り紙や図形を基にした学びも多くある。

ここでは各学年の学習内容を列挙し、どのような学びが設定されているかみていくこととする。ここで挙げる内容は、モンゴル国の国定教科書『美術・技術』のⅠ～Ⅴの学習内容(モンゴル教育文化スポーツ省, 国定教科書, 2018より筆者翻訳)から抜粋している。

#### ① 1年生の学習内容『美術・技術Ⅰ』

- ・鉛筆の正しい持ち方、描き方。
- ・四角の枠内に、斜めや水平、縦に線を等間隔に描く。
- ・円の内側に、斜めの線や円周をだんだん小さくして円を描く。
- ・花や家の形の中に、斜めや平行線、垂線を等間隔に描く。
- ・油性鉛筆や蠟でできたカラー鉛筆で、四角形や三角形、円などの図形の内側を示された方向に塗る。
- ・点を結んで形を描く。
- ・葉っぱでクラフト \*示された表現から1つ選んで、その形に葉っぱを貼る。
- ・平らにした粘土や石、布に絵を描く。
- ・粘土でつくる。
- ・筆を使った塗り方(水彩絵の具)
- ・短冊状の紙を編む。
- ・お気に入りの動物を描く。
- ・線種からイメージしたものを描く。
- ・家族や友達を描く。
- ・詩の内容を基に絵を描く。
- ・紙を折ってモンゴル伝統の服をつくる。

#### ② 2年生の学習内容『美術・技術Ⅱ』

- ・点、水玉、線で描く。
- ・草や葉を使って描く。
- ・花、葉、草を簡単に描く方法
- ・硬い紙に絵の具を付けて描く。 \*スタンプング
- ・図の作成
- ・原色で描く。 \*モンゴル国の国旗の色に基づく。
- ・混色 \*色のたし算

- ・紙を用いた指人形づくり \*おとぎ話
- ・紙の上で手の輪郭をなぞり、その形からイメージして描く。
- ・木を描いて、家系図をつくる。
- ・折り紙
- ・四角形や三角形などの図形を組み合わせて描く。
- ・2色（同系色など）の短冊で描く。
- ・石に描く。\*遺跡に残された動物の絵の紹介を含む。
- ・紙皿や色紙を使ってつくる。
- ・粘土でつくる。
- ・モンゴルの伝統文様を描く。
- ・動物の描き方
- ・漫画のキャラクターを描く。

### ③ 3年生の学習内容『美術・技術Ⅲ』

- ・点を描く \*水彩絵の具のついた指を紙に押し当てて描く。
- ・自然素材を使ってつくる。
- ・植物を簡単に描く。
- ・左右対称の模様をつくる。
- ・硬い紙で線を描く。
- ・花や葉の模様をつくる。
- ・動くおもちゃをつくる。
- ・硬い紙で形をつくり、絵具を付けてもようをつくる。 \*スタンピング技法
- ・友達を描く。
- ・折り紙 \*色紙を折って、折った形を貼り付け、場面をつくる。
- ・伝統民芸に親しむ。 \*羊の鼻の形をなぞると、モンゴル特有の文様になる。文様の理解
- ・動物の動きを点や線で表す。
- ・紙皿を使った工作
- ・モンゴルの芸術家の絵画を読む。
- ・布とビーズの装飾
- ・原色に白を混ぜて、描く。
- ・水生生物を粘土でつくる。
- ・モンゴルの芸術家の絵画を読む。
- ・光沢紙に描く。
- ・暖色と寒色を知り、描く。
- ・廃材を使った制作 \*マッチ箱などの空き箱工作
- ・折って描く。 \*デカルコマニー技法
- ・童話の登場人物を描く。
- ・毛糸でもようをつくる。
- ・異素材を組み合わせてつくる。 \*紙コップや段ボール紙などを使う。
- ・絵画を読む。 \*航空写真による作品などの鑑賞

### ④ 4年生の学習内容『美術・技術Ⅳ』

- ・スケッチ
- ・歌に合わせた絵本づくり
- ・音楽を聴いて、線や色でそのイメージを表す。
- ・左右対称になるよう形を切り取る。

- ・日本や中国の芸術家作品の鑑賞 \* 葛飾北斎の浮世絵が紹介されている。
- ・切り取った形に切り込みを入れ、組み合わせてつくる。
- ・ものの構成要素 \* 身近にあるものを分解する。
- ・動物を描く。
- ・反対色の適切な使い方
- ・紙の起源
- ・飛び出す仕組みを使ったカードづくり
- ・3次元のペーパーアートをつくる。
- ・技術モデルの作成
- ・カーデザイン
- ・アルミ箔を用いたものづくり
- ・飛行機的设计 \* ペーパークラフト
- ・モンゴル絵画法によるドローイング
- ・クレヨンなどの油性の画材で描く。
- ・油彩画材と水彩絵の具で描く。 \* バチック技法
- ・世界のアーティスト \* 絵画作品鑑賞

#### ⑤ 5年生の学習内容『美術・技術V』

- ・様々な芸術を知る。
- ・シンプルなオブジェを制作する。(円柱、三角錐、立方体、直方体) \* 展開図を作成してつくる。
- ・天然素材(石)から作品をつくる。
- ・動物の動きを描く。
- ・紙を折る。(ペーパーフィギュア) \* おやつに使う楊枝の先端に、紙をいろいろに折ってかざりをつくり取り付ける。その後、実際に簡単なお菓子をつくり、できた楊枝を使い、お菓子に飾る。
- ・クレヨンで描く。 \* スクラッチ技法
- ・紙の装飾品をつくる。 \* ラッピングの飾り
- ・オープン構図で描く。 \* モンゴル絵画で多く取り入れられている構図で、多くの登場人物を画面全体に散らばるように配置して描く。
- ・簡単な手縫いで裁縫を学ぶ。
- ・モンゴル絵画法による装飾を描く。
- ・布製バッグをつくる。
- ・距離を描く。 \* 遠近法、一点透視法
- ・物体の描き方 \* 対象の中心に線を引き、左右対称を捉えて描く。
- ・幾何学的図形の描き方 \* モンゴルの伝統文様
- ・サンドイッチをつくる。 \* 調理実習
- ・モンゴルの芸術家の作品鑑賞
- ・廃材を使った作品づくり \* 帽子などの被り物
- ・周波数イメージングで描く。 \* 同じ形や色などを繰り返す。(パターン)
- ・技術モデルの作成 \* ラップの芯で車をつくる。
- ・世界のアーティスト \* 絵画作品鑑賞
- ・人物を描く。 \* 手本の描き方をみながら、人物を描く。
- ・リッチなサラダをつくらう。 \* 調理実習

小学校のスタートである1年生最初の学習は、鉛筆の持ち方や、比較的短い直線や曲線の描き方など、描画に関

する基礎的事項から始まり、水彩絵の具の用いた作品制作や連続する長い曲線を描く、切り絵、折り紙、色面構成など段階を踏まえながら内容が構成されている。低学年では基礎的事項が数多く内容に盛り込まれている。

全ての学年において、手本が示され、手本をまねることで、多くの学びを習得できるようになっている。描き方や折り方などが順を追って具体的に提示されている。丁寧につくり方が示してあり、その通りに実践すればつくり方がわからないで困る子は多くはいないと推察される。準備から完成までのつくり方だけでなく、使う材料や用具も示してあり、見通しをもちながら学習に臨むことができる。教科書には安全管理を徹底させる説明だけではなく、制作に関する解説や手順、指示事項がほとんどの内容に明記されており「試してみましょう」「コピーして描きましょう」など具体的な活動の指示もある。また、制作に関わった質問もあり、考える拠り所がつかめたり、着目すべき点を意識したりすることができる。どのように考え、どのようにつくっていけば教科書に示されたように仕上がるか、教科書をみれば子どもは理解できる。どの内容にもつくり方や表し方が示されており「技術」の獲得をめざした教科書であることがわかる。また「対象を示しているのはどれでしょう」や「絵を描くことで自然を豊かにする方法を話し合ってください」など、友達と考えたり、意見を共有し合ったりする活動も取り入れられ、子どもの主体性を引き出そうとする意図があることも推察される。

美術作品の鑑賞についても、日本や中国といったモンゴル国と関わりのある国々の美術作品や、ダヴィンチやレンブラントなど世界の芸術家の作品も鑑賞教材として提示されている。作品とともに、詳細な解説も載せられている。作品をみて、描かれているものや使われている色などについて説明したり、他の作品と自分たちの絵を比較したり、多彩な方法での鑑賞活動も設定されている。モンゴル国の教科書では、「鑑賞」ではなく「絵を読む」という表現を用いている。鑑賞とは、形や色、構図などから、作者の意図や思いを読み解いていく活動である。「読む」とすることで、作者の思いや表現意図などにまで思考を広げることができ、鑑賞が深まる。

特徴的な内容として、どの学年にもモンゴル国の伝統的な文様、特有の構図、色などがある。これらは鑑賞の対象としてだけではなく、描くことも目的とされている。文様の描き方がわかり、モンゴル特有の構図をまねながら描くことは、より深く自国の文化の特徴を理解することができる。活動を通して、自国の文化を理解し、尊重する態度を育てることを目的としていることがわかる。

各学年の教科書の冒頭には必ず「序文」がある。1年生教科書の序文には、次のような文章がある。

「このレッスンを通して、美しい絵を描く技術を学び、花や葉を貼り付け、絵に色を塗るなど 楽しい活動を楽しみます。これらの興味深い演習を学ぶことで、創造的な思考、成長、心を発達させることができます。」

1年生には、かなり難しい言葉で書かれているが、学年に応じて学ぶ目的や内容など伝えたい事柄が示され子どもたちが本教科書に対して期待感をもって学びに向かうことができるようなメッセージが綴られている。

## (2) 教科書題材からみえるモンゴル国の技術指導

各学年の学習内容は、全学年において学習内容がセクション1~4の4つに分けて整理されており、1から4に進むほど既習の学びを発展させた内容が設定されている。

モンゴル国の伝統文化に関わる内容が各学年に複数あり、自国の文化を知り、尊重する態度を育てようとする意図がみえる。モンゴル国の特徴的な色を使った制作や文様の描き方、絵画作品の鑑賞がどの学年においても学ぶことができる。文様の指導では、描き方を指導する前に、その意味を、鑑賞を通して理解させ、文様を象った紙を切り取らせたり、絵の具で描かせたりするなど学年の発達段階に応じた指導の工夫がある。

また、教科書には、「実行」、「情報」、「(友達と)一緒に話す」、「練習作品」、「宿題」などのマークが記され、これからすべきこと、使用する材料や用具、制作手順、話し合い活動、確認事項などが子どもによくわかる工夫がされている。子どもは、教科書をもとに教師が提示するつくり方や描き方などを理解し、その通りに表現できることをめざすことで、技術の習得と定着が図られる。そして、学年が上がると、マニュアルの理解だけでなく、新しいアイデアを提案したり、それを実現できるよう努力したりすることも目標となる。

## 4. 日本とモンゴル国との技能指導

両国の技能指導には、大きな違いがある。「美術・技術」という科目名からも推察されるように、モンゴル国では技術の獲得を重視していることがわかる。教科書には、つくり方などのマニュアルを図解するなど丁寧に示さ

れ、それを手本とすることで、確実に作品として制作することができる。技術を伝え、学ばせ、的確に表現できるようになることを目標としている。日本は技術ではなく、技能と示している。図画工作科における技能指導は、自己を表現することのできる能力の育成のためであり、新しい技術を使った学習内容を子どもの実態に応じて提供する。しかし、制作を通して学ばせることが基本であり、技術を示しても、それを使って自分の思いを実現させる具体的な方法については、子どもに思考させることを重視している。

モンゴル国の教科書では、一学年に設定されている題材数は40～43ある。日本の一学年における題材数は20～23であるから倍近くの内容が設定されていることになる。日本の場合、一題材にかける時間数はおおむね2～6時間である。多いもので8～10時間かけて作品を制作することになるので、1年間の題材数をモンゴル国のように多く設定することはできない。それら40もの内容が4つのセクションに分けられ、セクションが進むにつれ発展的な内容になったり、難易度が増したりしている。モンゴル国では短時間で多彩な技術が獲得できるよう具体的に表し方を提示したり、考え方の手順を紹介したりしている。丁寧な解説とともに1年間で難易度の異なる内容を設定し、技術に対する知識・理解をねらいとしていると考えられる。

特筆すべき学習内容として5年生に日本の家庭科で学習する被服や調理が、造形題材と混在して設定されていることである。「美術・技術」という教科は、日本人がイメージする図工や美術とは異なる。技術とは、造形表現に必要な技術と、ミシンの使い方などの裁縫や、調理の仕方といった生活する上で必要となる技術であり、材料を問わずものづくり全般に係る技術を意味しているといえる。視覚的にも美しくみえるような飾りをつくり、それを調理した料理に飾るといった内容も設定されており、我が国でいうところの図画工作科と家庭科の教科横断的な学びもある。

## 5. モンゴル国と日本の美術教育に関する今後の取り組み

今回示したレポートは、両国の教科書のみ取り上げた比較である。モンゴル国の学校教育全体のカリキュラムや小学校でのカリキュラムについては、今後研究を進め、カリキュラムを明らかにした上で、学習内容を比較研究していくことは不可欠である。学習内容をみていくことは、その国がめざしている国や国民の姿を推察することができる。日本の小学校においては、美術を専門とする教師が必ずしも子どもの指導にあたっているわけではない。教科や学習の目標、授業の展開の仕方はわかっているが、実際の授業では、子どもの指導に戸惑うことは多々ある。活動や作品として表されたことは、子どもそのものであるから、子どもの表現に指導者の考えを介入させることは、子どもの表現そのものに影響を与えてしまうのではないかという懸念の下に指導していることは少なくない。小学校教師を対象とした研修会において「具体的にどのように指導してよいかわからない。」「どの程度まで子どもの表現（活動）に口出ししていいのか。」といった声が聞かれた。他者の価値を押し付けることを良しとしないことで、実は子どもに表現することへの困難さを感じさせていることも多いのではないか。以前、「担任の先生が、こんなふうに描くといいよと教えてくれてたら、こんなに絵を描くことが嫌いにはならなかったと思う。」と話した学生がいる。子どもは、もっと上手に描きたい、つくりたいと思い、表し方を教えてほしいと願っているのである。学習指導要領に示されている「知識及び技能」の育成は、図画工作科の課題の一つではないかと考えている。今後、モンゴル国の技術指導についての研究を、子どもの主体的な表現を保証しつつ、我が国の技能指導の在り方を問い直す契機としたい。

本レポートは JSPS 科研費 課題番号：JP22K00699 の助成を受けたものです。

## 引用文献

文部科学省 (2018). 『小学校学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説図画工作編』  
日本文教出版 (2020). 検定教科書『たのしいな おもしろいな ずがこうさく 1.2 上』

- 日本文教出版（2020）. 検定教科書『たのしいな おもしろいな ずがこうさく 1.2 下』
- 日本文教出版（2020）. 検定教科書『ためしたよ 見つけたよ 3.4 上』
- 日本文教出版（2020）. 検定教科書『ためしたよ みつけたよ 3.4 下』
- 日本文教出版（2020）. 検定教科書『見つめて 広げて 5.6 上』
- 日本文教出版（2020）. 検定教科書『見つめて 広げて 5.6 下』
- 独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（2021）. 『高等教育・質保証システムの概要 モンゴル』, 4-16
- モンゴル教育文化科学スポーツ省（2019）. 「芸術」『初等教育カリキュラム』(БАГА БОЛОВСРОЛЫН СУРГАЛТЫН ХӨТӨЛБӨР), 64-70
- モンゴル教育文化科学スポーツ省（2018）. 国定教科書『美術・技術Ⅰ』
- モンゴル教育文化科学スポーツ省（2018）. 国定教科書『美術・技術Ⅱ』
- モンゴル教育文化科学スポーツ省（2018）. 国定教科書『美術・技術Ⅲ』
- モンゴル教育文化科学スポーツ省（2018）. 国定教科書『美術・技術Ⅳ』
- モンゴル教育文化科学スポーツ省（2018）. 国定教科書『美術・技術Ⅴ』

# Skill instruction in elementary school art education in Mongolia and Japan

Junko SAITO

(Okayama University of Science )

This report summarizes the characteristics of skills instruction in art education (arts and crafts) in Mongolian and Japanese primary schools. Based on the Courses of Study and textbooks, this report focuses on skills and compares their learning content. The name of the subject in Mongolia is 'art and technology'. In Mongolian textbooks, not only skills such as how to draw and how to make things, but also how to sew and how to cook vegetables are included. It can be said that the study of technology consists of the skills necessary for formative expression and the skills necessary for daily life. In Mongolia, this subject includes a lot of learning about technology, revealing an emphasis on skills instruction.

Keywords: Art education, Elementary school, Skill, Mongolia, Comparative analysis